

1                   リンパ節生検材料のFCMによる細胞解  
2 析の有用性 ～病理診断との比較による結果の解釈  
3 ～  
4

5 ○菅野ななみ 四方田千春 綿引一成 松林恵子 麻生  
6 裕康 (千葉県がんセンター臨床検査部)  
7

8 **【目的】** 2001年5月から2008年8月までに当セン  
9 ターにおけるリンパ節生検により悪性リンパ腫と診  
10 断された症例のうち、同時にFCMによる細胞解析を  
11 実施した130例についてレトロスペクティブに検討  
12 し、中でも症例数の多かったDiffuse large B-cell  
13 Lymphoma(DLBCL)とFollicular Lymphoma(FL)につ  
14 いて解析し、若干の知見を得たので報告する。

15 **【対象および方法】**DLBCL36例,FL34例を対象とした。  
16 DLBCLの細胞表面マーカーは一般的にCD5(-/+),  
17 CD10(-/+)と表現され、同様にFLではCD5(-),CD10  
18 (+/-)とされているが、その頻度については明確とな  
19 っていない。そこで、(-/+),(+/-)の表現についてそ  
20 れぞれの症例でその実態を検討した。なお、FCMでは  
21 20.0%以上の細胞が検出されたものを陽性とした。

22 **【結果および考察】**DLBCLでのCD5が陽性と判断さ  
23 れた症例は5例(13.9%)で多くの症例で陰性となっ  
24 た。またCD10では陽性例が14例(38.9%)となった。  
25 一方、FLではCD5が陰性とされているが、陽性例が2  
26 例(5.9%)出現した。また、CD10では陽性例が25例  
27 (73.5%)と大半を占めた。さらに、CD5,CD10について  
28 FCMと当センター病理検査科における免疫組織化学  
29 染色(IHC)の判定結果を比較すると、不一致となった  
30 症例はCD5ではDLBCLで4例,FLで1例にみられた  
31 が、これらは抗体のクローンの違いや検出感度の違  
32 いなどが考えられた。一方、CD10ではDLBCLで1例,  
33 FLでは4例で乖離がみられたが、FCMによる細胞解析  
34 における他の抗体の反応性を考慮することでIHCの  
35 結果とほぼ一致した。これらのことから、FCMによる  
36 リンパ節生検材料の細胞解析は迅速性に優れ、感度  
37 も高く、判定もほぼ一致することから有用性の高い  
38 方法と考えられた。       043-264-5431(内線3710)  
39